

## 神の息と人の息

2015/06/30 大阪保育福祉専門学校 チャペルアワー

わたしは奈良基督教会牧師で、合わせて教会が設立した親愛幼稚園の園長をしています。38年前に神学校（牧師になるための学校）を卒業して、幼稚園に関わるのは四つ目で、合計すると20年目になります。

けれども元々、わたしの人生の計画には、子どもに関わる仕事をするということはありませんでした。ところが、今から38年前ですが、神学校を卒業して、牧師の卵として教会に赴任したところ、そこには併設の幼稚園があって、いきなり幼稚園の責任を負わされるハメになりました。そのときから、大きな苦労と同時に、それまで全く知らなかった思いがけない喜びを経験することになりました。

最初の苦労の一つは、毎週1回、幼稚園全体の礼拝があって、子どもたちにお話をするのでした。神学校ではむづかしい勉強はいろいろしましたが、子どもとどう接したらよいか、どのように話をしたらよいか、などということは習いませんでした。

5分余りの話をするために原稿を書き、ひとりでリハーサルをします。大人に話すときは原稿を見ながら話すことができますが、子どもたちに話すときは原稿を見ることはできません。覚えながらリハーサルをするのですが、リハーサルをしてみると、言葉が詰まる、むづかしい、内容のポイントがはっきりしていない、など、いろいろ問題を感じます。そこを何とか直して本番に臨む。子どもたちが意外にも乗ってくれたときは、ほんとうに楽しい。また子どもたちがいろいろ言いだして收拾がつかなることもありました。今でもあります。

子どもの礼拝でどんなお話をするか。今はどうかわかりませんが、以前はキリスト教の幼稚園、保育園向けに礼拝お話集がいくつか出ていて、それを使ったりもしたのですが、どうも自分にはしっくり来ないことが多い。結局わたしは、毎回、聖書の中のひとつの物語を自分なりに話すことになりました。聖書は面白い。内容が限りなく豊かで深いです。聖書にろくに触れずにいるのは人生の損失です。

最初の教会・幼稚園に5年勤めた後、20年ほどは保育、幼児教育の場から離れていましたが、14年前に京都市内の、幼稚園のある教会に赴任して、それから2回異動があって、今は奈良。3回目の園長をして今に至っています。やはり毎週、全体の礼拝で子どもたちに聖書の話をしています。

皆さんは、聖書にある天地創造の物語をご存じでしょうか。また最初の人間が造られた話はなじみがあるでしょうか。毎年、5月頃にこんな話をします。旧約聖書の創世記という本の中にある物語です。

---

神さまは天と地を作られました。また木や草や花、動物も作られました。とてもすばらしく美しい世界ができました。けれども何か足りません。何だと思う？

そうです。人間です。神さまは自分とお話しができる人がほしかった。人間を造ろうと神さまは思われました。

そこで神さまは土を集めて、心をこめて人間を造られました。とてもきれいで立派な人間の形ができました。

でも動きません。寝たままで。生きていない。息をしていない。神さまは、その人が生きてほしい、と願われました。

そこで神さまは横になっている人に近づいて、その人の鼻に、神さまの命の息をふーっと吹き込まれました。

するとその人は目が開いて、息をして、手が動き、足が動いて、起き上がりました。生きた人になったのです。神さまの息ってすごいね。

神さまと、神さまに造られた人は仲良しです。

神さまは「よかった」と言って喜ばれました。

神さまは、最初の人だけではなく、わたしたちも造って下さいました。みんなが生まれるとき、神さまはみんなひとりひとりに、ふーっと命の息を吹き込んでくださったのです。だからどんなことがあっても大丈夫。神さまの力が、息がみんなの中にも吹き込まれているのですから。

(お話の最後にお祈りをします。)

---

こんな話をするとき、子どもたちの顔を見ながら、ときどき質問しながら話していくのですが、大事にしたいことがふたつあります。

第一は、話す自分が、この話を自分のこととして感じるようにする、ということです。このお話をする自分にも、神さまの不思議な息が吹き込まれている。それを深く息をしながら感じてみる。わたし自身がいろんな悩みや困難を抱えてしばしば息が詰まる。息も絶え絶え。呼吸困難な状態になる。しかしこの自分にも、神さまの命の息が吹き込まれていることを深く心と体に感じてみるのです。

新約聖書にはこういう話があります。

イエスの弟子たちが、ある日曜日、迫害を恐れて部屋に閉じこもっていた。イエスが捕らえられて十字架につけられた後、自分たちも捕まるのではないかと恐れていたのです。家の戸に鍵をかけて、息を殺すようにして心も身体もこわばっていました。

そこにイエスが入ってこられて、「あなたがたに平和があるように」と言われて、弟子たちに息を吹きかけられた。イエスの命の息を吹きかけられたとき、弟子たちは息を吹き返し、喜びが湧き起こり、心は喜びに満ち、身体中に力がみなぎりました。

「だれだれの息のかかった人間」という言葉がありますね。ある人の影響を強く受けた人間のことです。

神の息のかかった人間、イエスの息のかかった人間。それは、人の痛みや悲しみを自分のことのように感じる人間です。苦勞している人を受けとめ、人を支え生かそうとする人間になっていく、ということです。

♪ あなたの息を送ってください。すべてがあらたになるように……

少し話が展開しました。言いたかったのは、お話をするとき、話す内容を自分のこととして感じるようにする、ということです。

子どもに話すときに大事にしたいもう一つのことは、そのお話の世界に入っていく、その物語を子どもたちと一緒に味わい楽しむ、ということです。

何年か前のことです。クリスマスの近づく時期、マリアさんとヨセフさんの話をしました。ナザレの町に住んでいたマリアさんとヨセフさん。王さまの命令が出て、ヨセフさんは先祖のふるさとである遠いベツレヘムまで行かなくてはなりません。ヨセフさんは心配です。マリアさんを残してはいけないので、一緒に行くことにしました。でもマリアさんのおなかには赤ちゃんがいて、もうおなかが大きくなっています。マリアさんは遠い道を歩いて行くことはできません。どうしたらよい？ 子どもたちの意見を聞きました。自動車に乗せて行く。バス、電車……いろんな意見が出ます。でもその頃は自動車もバスも電車もなかった。どうしたらよいか。するとある子どもが「だっこしていく」「おんぶしていく」と言いました。

それは無理です。でもそのとき、その子がヨセフの身になって、何とかマリアさんを連れて行かねばと本気で心配して考えてくれた優しさに、話しているこちらが感動しました。

こういう子どもたちの優しさに出会うと、こちらも励まされます。

聖書に限らないのですが、とりわけ聖書のお話をするときに大事にしたいことを二つ言いました。第一は、子どもたちだけではなく、話す側の自分もまたお話の聞き手である。自分に関係があると受けとめてから話すこと。

第二は、聞き手と語り手が物語、世界を共有し、お話の世界の中に一緒に入っていく。それを楽しむ。これが第二のことです。

毎日ではないのですが、朝、門の外に立って子どもたちを出迎えます。「おはようございます」と声をかけてタッチする。今は園児が約 100 名で、100 人の子どもに声をかけてタッチすることになります。一緒につれて来られる弟や妹、赤ちゃんにもタッチします。アーケードの商店街に面していて、車は通らないので助かります。見つけたら走ってくる子もいます。子どもたちはほとんどは喜んで園長先生とタッチしてくれる。ところが中には恥ずかしい子、機嫌の悪い子もいて、タッチできない場合もあります。ある男の子がいました。タッチを避けるのです。ずっと長くタッチさせてくれなかった。ようやく日によってはタッチするようになってきた。ある日、いつものように、お母さんと、妹とその子がやってきた。タッチしようとしたところ、何か不機嫌なのです。その男の子は、今日ほどの順番でどのタイミングでタッチするかという予定があって、予定と違うことになったので機嫌を損ねたのです。むづかしい。

ところがある日、園庭でその子とたまたま出会ったとき、その子が声をかけてきました。「園長先生、お礼拝ありがとう」

びっくりしました。それから何ヵ月か経って卒園式の日午後、またたまたま出会った。「園長先生、お礼拝ありがとう」「はるきくんはお礼拝が好きなんやね」「うん……」。

園長をしていて思いがけない幸せを与えられる時でした。

親愛幼稚園は正門から入って 40 数段の階段を登ることになります。門のところで入るのをためらっている年少の子どもがいて、お母さんが困っていることがある。そこに年長の子どものがやってきて、年少の子どもを連れて一緒に登って行ってくれるのを目にすることがあります。

子どもたちの中に、何かとても大切なものが育まれつつあるのを感じる。こうしたことが園長には大きな喜びです。神さまの息がこの子どもたちの中にいつまでも深く強く通っていてほしい、息づいていてほしいと願います。

園長が子どもたちと接するのはごく一部です。日常的に子どもたちと接している先生たちは、子どもたちとの間でたくさん苦勞もしつつ、喜びもたくさん経験します。

人が育っていく。育まれていく。人の心と体の成長、人と人の関係の成長に関わるのは尊い仕事です。生きがいのある仕事です。しかし重い仕事です。

ピアノの音ひとつが子どもたちの心を豊かに育む音であるか、それとも単に機械的な音になってしまっているか。感性を閉ざすか、開くか。

人間に関わる働きをするためにはとりわけ、自分自身の誠実な学びの姿勢が絶対に必要です。

同時に、自分が何かに支えられ、導かれるという支え、拠り所が必要です。聖書は必ず、その支え、導き、拠り所となってくれるでしょう。神の命の息がわたしにも皆さんにも吹き込まれています。

皆さんのこれからの学びと働きに期待し、神さまの祝福と導きをお祈りします。